

イギリスの大学院で学んで

第十二、十三回生 清水 晶子

(公益財団法人中村元研究所専任研究員)

平成八年、九年度、第十二回、十三回の善光寺育英生として奨学金をいただき、イギリスで学ぶ機会を与えていただきました。現地調査を踏まえてジャイナ教徒の宗教生活に関するテーマで学位を取得したいと思つての留学でした。ケンブリッジ大学でMPhil(哲学修士)の課程を修了した後に、ロンドン大学の博士課程に移りました。平成十八年に論文を提出し、口頭試問(Viva)に合格した後で、正式にPhD(博士号)が授与されたのは平成十九年でした。長期に渡る留学生活でしたが、善光寺様、育英会の皆様をはじめとしていろいろな方のご支援が大きな心の支えとなりました。お亡くなりになられた黒田大圓先生、中村元先生、阿部慈園先生に直接ご報告できなかつたことは心残りに思っています。

ここでは、イギリスの大学院での学生生活について印象に残ったことを少しご紹介してみたいと思います。ケンブリッジ大学では、博士課程に進む前段階として社会人類学科の一年間の

MPhilコースに登録し、必修の政治、経済、宗教、親族関係の四科目を履修しました。イギリスの大学院では、スーパーヴァイザーと呼ばれる指導教授が学生を個人的に指導する制度（スーパーヴィジョン）があります。学生は課題図書を読み、エッセイ（小論文）を提出し、指導教授と一対一でディスカッションした後でその成果を踏まえて仕上げます。二週間ごとのエッセイ提出は大変でした。学年末には、二科目の筆記試験と六千語の課題論文、MPhilの学位論文も指導教授からの添削を受けて提出しました。新学期は十月に始まり、六月に行われる筆記試験、八月に提出する学位論文の執筆というあつという間の一年間でした。慣れない英語での多量の読書、講義、ディスカッションでは苦勞したり、追試のチャンスのない試験では非常に緊張しました。

ケンブリッジ大学での学生生活において思い出深いのは、学寮（カレッジ）での生活でした。私の所属していたルーシー・カヴェンディッシュ・カレッジは、二十一歳以上の社会人を経験した女子学生のための新しいカレッジ（一九六五年創立）で、小規模でも活気にあふれた雰囲気がありました。学期の間は学生寮での生活が中心となり、イギリスはもとより世界各国からの学生と研究者が在籍していました。私のいた寮は、古い邸宅を改造した建物に学部生五人と院生の四人（イギリス人四人、カナダ、ドイツ、マレーシア、フィリピンからの留学生がそれ

ぞれ一人ずつ）で住んでいました。同じ寮で過ごした学生達は、医学、法律、自然科学、エジプト学、英文学、歴史等を専攻し、現在は皆職業について活躍しています。苦楽を共にしたカレッジで親しくなった友人達は、かけがえのない存在となりました。

MPhilの学位を取得後、博士課程ではロンドン大学のキングス・カレッジの神学・宗教学科に登録し、当時は南インドのジャイナ教を研究されていたフリードヘルム・ハーディー教授の指導を受けました。最初の年はヒンディー語を学び、二年目はインドに一年間滞在して、デリー大学近辺にある宗派の異なる三つのジャイナ教徒のコミュニティーに関して現地調査を行いました。論文の作成中に、先生が突然死されたので、ロンドン大学のアジア・アフリカ学院のピーター・フリーユルゲル先生が指導を引き受けて下さいました。学院にヨーロッパにおけるジャイナ教研究の拠点、Centre of Jaina Studiesが開設された時から、所長を務められている先生から丁寧な指導を受けられたのは幸運でした。ジャイナ教研究所で毎年開催される、著名な研究者による講演や研究発表を聴講し、交流できたのは大変勉強になりました。学院の図書館をはじめ大英図書館では、大学院の学生には入館できる年間パスが発行され、充実したインド関係の参考文献が自由に閲覧することができました。

海外での学生生活には言葉や習慣の壁をはじめとしてさまざまな困難が付きまといまます。口

ンドンでは、住む所に恵まれず長期短期合わせて数回引越しました。イギリス国内もほとんど旅行できませんでしたが、無料で気軽に入場できたナショナル・ギャラリーや大英博物館で過ごすのは、心安らぐ時間でした。自分のやりたかったことに取り組んでいるという思いはありましたが、問題を抱えながらも途中で投げださずに済んだのは、奨学金という形で大勢の方々に支えていただいていたことや、友人達やフリーゲル先生が忍耐強く励まして下さったおかげだったと、月日がたつた今は懐かしく思い出すことがあります。